

【実践報告】

教育実習Ⅰ（小学校）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 佐伯 育郎

1 はじめに

本実習（教育実習Ⅱ・Ⅲ）に臨むにあたり、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことを目標とする。前年度に終えた観察実習（教育実習Ⅶ）の体験、各教科教育法の学びをふりかえり、教材研究や学習指導案作成の仕方などをより深く学習する中で、事前に取り組むべきことを明確にする。小グループに分かれてからは、教材研究・教材開発、模擬授業に取り組む。空きコマなどを活用して、模擬授業に関する担当教員との打ち合わせを行い、指導を受ける。本実習終了後は、グループのリーダーによる実行委員会を中心に教育実習報告会を企画・運営・実施し、学修のまとめとする。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前ガイダンス、全体会Ⅰ・Ⅱ	1月～4月	<ul style="list-style-type: none">・2年次後期の1月下旬（もしくは2月初旬）に事前ガイダンスを行い、教育実習Ⅰの趣旨・スケジュールや春期休業中の課題などを確認し、グループメンバーおよびグループ毎の目標を決定する。・担当教員からのアドバイス（教材研究のポイント、教科書・指導書などの資料の活用法、指導案の提出・添削の方法など）、春期休業中の課題の提出、第1クール担当教員と模擬授業の打ち合わせなどを行う。・担当教師による示範授業と協議会を体験するとともに、今後の取組についての打ち合わせをグループ毎に行う。・ループリック（授業評価票）を配付し、評価規準（基準）、評価方法について担当教員から説明する。
グループ別模擬授業	4月～7月	<ul style="list-style-type: none">・グループ毎に模擬授業に取り組む。・教材研究・題材開発に取り組み、学習指導案を作成する。担当教員と模擬授業に関する事前打ち合わせを行う。模擬授業をするにあたり、事前に模擬授業の練習を自主的に行う。・グループのリーダーを中心に実習報告会実行委員会を組織し、4年生（前年度実行委員）との「教育実習報告会」引き継ぎ会を行う。
全体研究授業Ⅰ・Ⅱ、全体会Ⅲ、事後学修	7月～9月	<ul style="list-style-type: none">・代表者による模擬授業（模擬授業45分・研究協議会40分、代表者4人、2会場、2回）を行う。・教師による激励、教育実習Ⅰのふりかえり、課題（学習指導案のデータ・プリント、自己評価シートなど）の提出をする。・夏期休業中、グループ別で模擬授業に自主的に取り組み、後期の教育実習Ⅱ・Ⅲに備える。

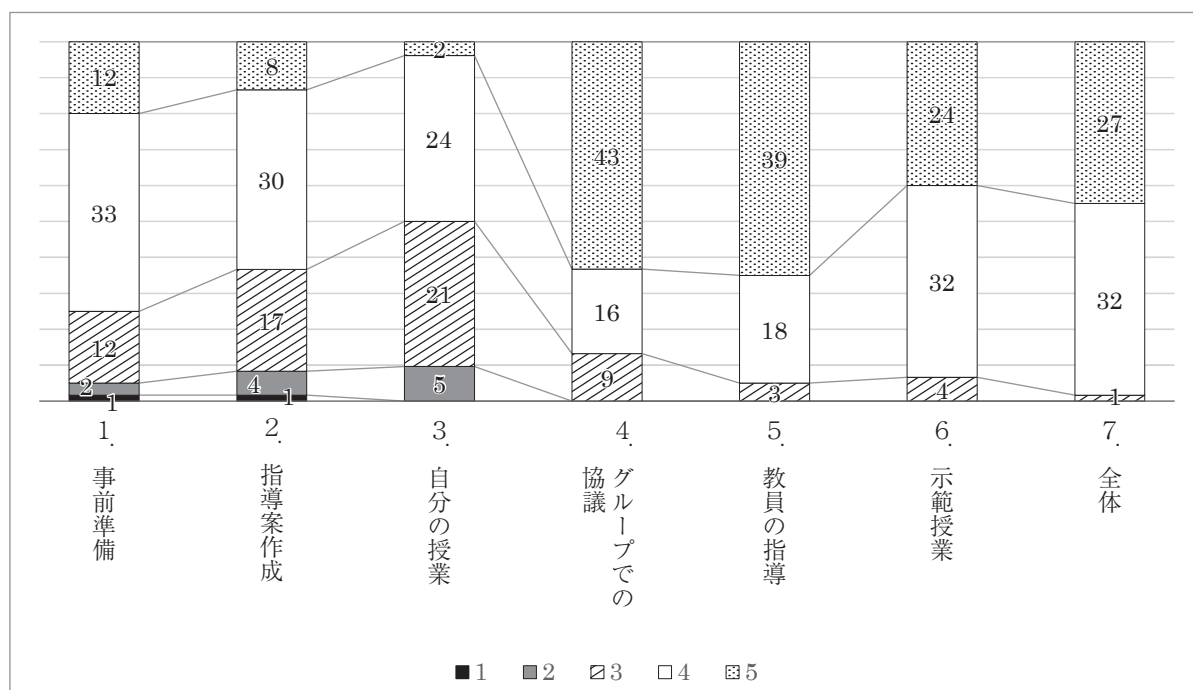
3 活動の概要

(1) グループおよび担当授業科目（受講者総数61人）

グループ（人数）	第1クール（3回）	第2クール（3回）	第3クール（2回）	第4クール（2回）
Aグループ（8人）	国 語	音 楽	理 科	体 育
Bグループ（8人）	音 楽	国 語	体 育	理 科
Cグループ（8人）	理 科	体 育	国 語	音 楽
Dグループ（7人）	体 育	理 科	音 楽	国 語
Eグループ（7人）	社 会	図 工	算 数	道 徳
Fグループ（7人）	図 工	算 数	道 徳	社 会
Gグループ（8人）	算 数	道 徳	社 会	図 工
Hグループ（8人）	道 徳	社 会	図 工	算 数

(2) 教育実習Ⅰ：全体振り返りシート（自己評価票）の集計結果（回答者60人、未提出1人）

平成30年8月2日の最終講において自己評価票（A4サイズ1枚の質問紙）による調査を行った。1. 模擬授業の事前準備・教材研究等の取組, 2. 学習指導案の作成, 3. 自分の授業, 4. グループでの協議, 5. 担当教員の指導, 6. 教員による示範授業, 7. 全体を振り返っての7観点についての満足度を5段階（5が最高, 1が最低）で学生に評価させた。結果はグラフの通りである（グラフ内の数字は人数）。満足度は、4. グループでの協議, 6. 教員の指導が高く、3. 自分の授業が最も低い結果となった。自分の授業が最も満足度が低いのは、昨年同様であった。教育実習Ⅰ全体に対する満足度は、全体的に昨年度より高かった。



【平成30年度・教育実習Ⅰ自己評価票 集計結果（A～Hグループ）】

4 成果と課題

今年度はA～D、E～Hグループの人数に偏りがあったため、専修の配置を変更し、人数を調整した。その結果、自身の教科の模擬授業を行うゼミが生じた。ゼミ担当の教員には、事前に了解を得たが、学生には申し訳ないことであったと考える。基本的には学生が所属するゼミ以外の教科を授業することになっているが、致し方ない措置ではあった。

ループリックを用いて、担当教員による学生の評価、学生による自己評価、学生間の相互評価に活用した。学生に対する最終的な評価・評定は、ループリックの結果そのままではなく、評定の境界に位置する学生については、教員による微調整を加えることによって修正した。担当教員による協議の上、学生の取組状況を考慮して評定を最終的に決定した。今年度も修正は少なく、滞りなく最終評価が決定した。

今年度の全体研究授業の教科は音楽・算数・理科・図工であった。積極性の高い学生達であったとともに、中間地点振り返りシートにも代表者として模擬授業をしたいか現時点での希望を記入させたことも、立候補への後押しになったのではないかと推察する。ただし、当初の立候補者1人が西日本豪雨災害の関係で授業することが困難になったため、急遽代理を立てることになった。代理を引き受けてくれた学生には、自身のゼミで行った教科で模擬授業を実践してもらった。快く引き受けてくれた点、質の高い授業をしてくれた点に対して非常に感謝している。全体研究授業で45分間の模擬授業を行った代表者には、特に大きな収穫があったことがうかがえた。今後も、教員による推薦がなくても立候補者だけで全体研究授業が成立することが望ましいと考える。

課題としては、全体研究授業の際に代表者、及び当該教科の指導教員に対する負担が大きかったことが挙げられる。代表者は、全体研究授業後の協議会において他の学生からの批評が集中することもあった。今年度はその点を考慮し、授業者と同じグループのメンバーには模擬授業のリハーサルへの参加、教材研究への協力を事前に呼び掛けた。教育実習Ⅰ終了後の教員反省会において、担当教員の1人から次年度はグループ単位で全体研究授業を行ったらどうかという提案をいただいたので、次年度には何らかの形で反映し、少しでも改善していきたいと考える。



【平成30年度・教育実習Ⅰ 第2講における教員による示範授業（理科・社会）】



【平成30年度・教育実習Ⅰ全体研究授業（音楽・算数）】